

◆障害学生の修学支援◆

第三回 研究の分類

筑波技術短期大学助教 石田久之

今回は、いわゆるソフト面のお話をいたします。実は修学支援といえますと、ここから先の内容に関して問題を抱えることが極めて多いと思います。その理由は、建物や大規模な設備については、改修や設置の必要性は理解できてもすぐに事が成るというのとはなかなか難しく、そうすると、なおさら、手の届きそうな所で、何とか目の前にいる障害学生に学習しやすい、生活しやすい環境をと考え、そのために解決すべき課題が山積みになる、ということだと思います。

情報公開と相互利用

さて、施設・設備以外の学習・生活に係わる内容ですが、やはり何と言つても、学習保障が大きな領域を占めます。この領域は、教授法・授業方法という分野に入ると思いますが、以前は大学に障害者が入学するという考えは一般的ではなく、教育方法の研究はほとんどありません（勿論、入学者が皆無ということではありませんが）。私が大学に入ったのは昭和四七年で

すが、その頃、「特殊教育」という名称の障害児・者への教育は、初等・中等段階までが主でした。その後、次第に障害者の大学への入学が増えてきましたが、修学支援についての研究は、現在でもあまり多いとは言えません。

とは言うものの、私も研究者の端くれですので、研究論文から見ることにします。この領域の特徴として、学会誌への投稿よりも、大学の紀要などでの報告が多いということがあります。なんとなく学問領域とは考えにくいこと、執筆者の所属するそれぞれの大学での個別の問題へのアプローチや解決方法の模索が課題となっているからだと思います。しかし、実際は同じような問題で悩み、また、他大学の状況が少なからず当てはまると言うことも稀ではないわけでして、大学間の情報の公開・相互利用は、この分野でもとても大切だと思います。勿論、個人情報保護は言うまでもありません。

主として身体障害学生への支援

国立国会図書館蔵書検索システムというものがありますが、これで「障害学生」、「支援」などをキーワードとして論文を探すと、少なくとも数件のリストが表示されます。しかしこれ喜んではいられません。いくつかを除外しなければならぬからです。例えば、「摂食障害」関連の論文があります。保健管理センターや学生相談担当の方の著作だと思いますが、本稿で述

べている「障害学生」の中には入りません。「適応障害」というのも、ここでは言及しません。

と、簡単に言いましたが、実は、「支援する障害学生とは誰なのか」という問題は簡単ではありません。「支援を求めている学生全て」と答えられればよいのですが、経費、人的資源などの面からそうもいきません。更に問題の解決方法が分らない場合は、支援のしようもありません。このようなことから、現在、多くの大学で支援対象としているのは、主に身体障害の学生です。つまり、視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由の学生が中心です。

「いや、うちの大学は、内部疾患のある学生にも支援・配慮をしている」とお怒りになる方がいらつしやるかもしれませんが、どの大学でも、というわけではありません。また、欧米では、主として読みや書くことに障害のある学習障害学生への対応が大きな課題となつていきますし、近年、わが国でも高等教育機関における軽度発達障害学生への支援が検討されつつありますが、ほとんどの大学で、まだ実数の把握も難しいのが現状だと思います。

そんなわけで、本稿で述べようとしているのは、主として、視覚障害(盲・弱視)、聴覚(聾・難聴)・言語障害、運動障害(上肢・下肢・他)の学生への支援です。ただ、軽度発達障害学生についても、少しふれようと思つていきます。

・身体障害学生以外への支援など

軽度発達障害学生の支援は、今後避けて通れない課題だと思えます。どのような課題があるのかという研究です。

ソフト面については五月・六月で終わらせるつもりでしたが、まだ、やつと入り口です。七・八月号で引き続き解説するつもりです。

障害学生修学支援セミナー

さて、今回は特にお願ひして、もう少し紙面を頂くことにしました。実は先日、日本学生支援機構(以下、機構といいますが)と筑波技術短期大学との共催により、京都で第二回障害学生修学支援セミナーが開催されました。この連載の冒頭(四月号)でも第一回セミナーの話題を出しましたが、ちょうどタイミングも良いので、このセミナーのことを説明しようと思えます。機構では、平成一六年四月より修学支援のための具体的取組についていろいろ検討してきました。その中で、先進的に支援に取り組んでいる大学の様子を、広く他の大学の方々に知ってもらうことも大いに意義があるのではないかとということこのセミナーを企画したわけです。

事務職員の方に

特に、事務職員の方々においでいただくと考えました。こ

そこで元に戻って、国会図書館の検索結果から、これらの障害に係わる論文を抜き出すと、過去三〇年ほどの中に二〇数編の論文を見ることが出来ます(筑波技術短期大学のテクノレポートを除きますが、これについては別に書くつもりです)。これらを多い順に分類すると以下のようになります。

・学習保障(聴覚障害・視覚障害学生、支援スタッフ)
学習保障は、授業保障とも、講義保障とも言われます。聴覚障害・視覚障害学生への講義での支援に関する報告が多いのですが、実技系授業での支援の取組や期末試験における特別措置なども含まれます。

支援スタッフには、直接に支援を行う支援者、支援者と障害学生の仲を取り持つコーディネーター、支援者養成などに関する内容が含まれます。

・キャンパス調査

施設を作った、改修したという内容ばかりではなく、キャンパス内を障害者の意見を聞きながら詳細に調査した報告があります。

・心の問題への対応

障害学生と障害のない支援者とのコミュニケーションの壁などの研究です。

これは、障害学生支援という学習保障が中心、つまり教員の仕事というように考えられがちですが、実際の学生生活では、他にも日常の様々な活動があり、それに応じた支援が必要となるわけで、事務方の強力な支援体制がなければ、立ちゆかないと考えているからです。また、学習保障一つとっても、例えば支援スタッフの募集や授業への配置などは、通常、事務の業務になっていきますね。

第一回東京セミナー

セミナーの第一回目は、次のような演題と内容で、本年二月に東京で行いました。

・「大学教育における障害者就学支援の実践と課題」(青山学院大学)。青山学院大学相模原キャンパスの整備、事務組織の改革、「学生ボランティア検討委員会」など。
・「筑波技術短期大学視覚部事務室の障害学生支援」(筑波技術短期大学)。入学試験での対応、キャンパス内施設設備、点訳、学生寄宿舎など。

・「岐阜聖徳学園短期大学部における視覚障害学生の記録」(岐阜聖徳学園短期大学部)。甘やかさない優しさで社会自立能力を得るための厳しさという立場に立った視覚障害学生の受け入れから卒業までの二年間。

二月というところの大学も入学試験の時期ですから、果たしてどれくらいの方々に出席いただけるのかとても不安でしたが、最終的に二八大学・三七名の参加を得ました。

話す方も聞く方も事務の皆さんで、私ともう一人のアドバイザーの二人だけが教員という、私にとっては何かちよつと落ち着かない集まりでもありました。

それぞれ三〇分ずつのお話の後、会場の皆さんから質問を受けましたが、その多くは、聴覚障害学生の支援に関する内容でした。具体的には、手話通訳の確保、ノートテイク講座の講師や講座の運営、メンタル面でのケア、音声認識、ノートテイカーの時間数や費用などに関してでした。

実はこのことはある程度予想がついたことでした。平成一六年度、機構では全国の十数大学を訪問し、ニーズ調査を行い、各大学の支援内容などをお聞きしましたが、多くの大学で聴覚障害学生の支援について心を砕いているとのことでした。

とりわけノートテイクに関連する支援事業に大きな力を注がれているようでしたが、同時に、支援スタッフの確保やその養成に多くの課題があることも伺いました。

これらのことから聴覚障害学生とノートテイクへの質問があることは想定できましたし、だからこそ、アドバイザーに聴覚障害教育の専門の方をお願いしたのですが、質問のほとんどが前述のような内容だということには、ちよつとビックリしました。

これらことから聴覚障害学生とノートテイクへの質問があることは想定できましたし、だからこそ、アドバイザーに聴覚障害教育の専門の方をお願いしたのですが、質問のほとんどが前述のような内容だということには、ちよつとビックリしました。

つてくれると、授業内容もわかっており、とても良いということですが、その確保はかなり難しいようです。

質疑応答の間、特に印象に残ったことは、皆さん熱心にメモをとっていたことです。できるだけ多くの情報を持つて帰りたいという気持ちの表れと感じました。

A (続き) ノートテイクの講座ですが、これも先程のセンターから講師を派遣していただき実施しております。二〇〇三年度は基礎講座を水曜日コースと金曜日コースに二手に分けまして、学生が受講しやすい授業のない時間帯を設定し、インターネット等で募集しました。各コース二〇人ぐらいずつの参加者がありました。

修了生には、副学長名での修了証を渡しています。将来的にはセンターに頼らず自前でノートテイクを行いたいという目標がありますので。

支援スタッフを大学内(学生)で組織し、その養成も自大学で行いたいというのが、関係する方々の共通した希望のようです。既存の手話や点訳などの学生サークルを母体としたり、福祉関係の教員に養成を依頼するなど、様々な働きかけが見られます。また、修了証の授与なども学生への動機付けには有効だと思います。

た(私自身は視覚障害関係の者ですので、手持ちぶさたでもありません)。

では、会場の雰囲気を実現してみましよう。以下、QとAは、『平成十六年度「障害学生修学支援セミナー」報告書』からの抜粋です。

【ノートテイク】

Q 一点目が、手話通訳の確保、人選、選定の仕方です。もう一点、ノートテイク講座の講師の選定、その運営の方法や運営の中心について伺いたいと思います。

A (青山学院大学) 一点目の手話通訳につきましては、聴覚障害者福祉センターに協力をいただき、ノートテイク、いわゆる要約筆記者と手話通訳者の両方を配置しております。

センターには、大学レベルのある程度高度な専門的な知識を通訳できるような方を選定していただきまして、手話通訳については主にゼミに対してお願いしております。人数的には連続してやると疲れますので一〇分交代ぐらいで確か二人配置しております。

日常会話程度の手話能力やノートテイク力では、大学の専門的な語句や内容を通訳・筆記できない場合があります。よく言われるのは、前年に同じ授業をとった先輩が支援スタッフにな

【個人情報】

Q 手話通訳者から質問がありまして、自分たちの通訳は果たして学生に伝わっているかどうかを確かめるために学生の成績を教えていただきたいということがありました。ただ、成績は個人情報になりますので外部の、地域のボランティアの方に、大学として情報を開示することが可能なのか、そういった質問に応じなければならぬ場合、どの程度での開示が可能なのか、お教えいただきたいと思っています。

A (アドバイザー) この件に関しては、成績を知らせる必要はないと思います。むしろ、そのアドバイスの仕方として、対象となる学生に対して、通訳に何か要求や要望がないかどうか、やり方についてどのような検討をしたらいいのかというようなことを話し合うように促すべきだと思いますし、また、通訳者のそういう意向を伝えたほうがいいと思います。

支援スタッフと障害学生とのコミュニケーションの重要性も多くの大学で伺いました。専門的・高度な内容の通訳に関する障害学生側の不安や上手にできたかどうかという支援スタッフ側の迷いなど、双方の言い分を率直に話し合える場の設定は重要です。また、支援計画の策定などにも、障害学生に参画を求め、支援者側の思い込みや考え違いがないように配慮する必要があります。

この他に技術的な質問もありました。障害学生の学習保障には、パソコンや視覚的表示装置などの各種機器が大きな役割を果たします。しかし、あまり一般的ではないので、これらの利用法などについて疑問も数多く生じます。

【音声認識】

Q 聴覚障害学生のために音声的な情報をパソコン上に取り入れたり、使用したり、実験にも参加したのですが、結論を言えばうまくいきませんでした。今そういったソフト、あるいはパソコンでできることがありますでしょうか。

A (アドバイザー) ノートテイクの代わりにパソコンの音声認識ソフトを使って、それを文字に変えてしまおうということですね。そういう試みというのはいくつかの大学や研究機関で行われています。ただ、結論から言いますと、実用的なものはまだありません。が、実用性を高める方法があります。講師がしゃべっていることを、他の人間が間に入って、音声ソフトが認識しやすいようにしゃべる方法です。でも、静かな部屋でないと駄目で、講義室の中では無理です。その辺の環境が整備されれば、例えば学内のLANを使ってやるという可能性はあると思います。

障害学生の支援に、学内LANや音声認識ソフトなどの話が

出てくるとちよつとお手上げと言う方も少なくないと思いますが、便利な物を使わない手はありません。掲示の代わりにメールによる情報提供などは、すぐにでもできる情報保障です。

第二回京都セミナー

二回目、京都でのセミナーには、四〇を超える大学などから六〇余名の参加をいただきました。募集定員の倍近くでしたので、会場は見るからに窮屈でした。講演内容は、支援コーディネーターや発達障害のある学生への支援というように、一回目とは変えてみました。質問も、やはり聴覚障害学生へのノートテイクに関するものが多かったのですが、弱視学生への期末試験での配慮や軽度発達障害学生への対応、障害学生支援への大学のポリシーに関する質問もあり、東京でのセミナーとは様子が少し違うという感じでした。

一緒に考えましょう

四頁で二回のセミナーの内容を詳細に説明することはできません。それでも紙面をお願いしたのは、会場の雰囲気や伝え、今後開催されるセミナーに、是非参加いただき、質問・問題を直に周りの皆さんにぶつけ、また一緒に考えて欲しいとの思いからです。この種の集まりは、他にはあまりありません。